

アリ、極テ淡キ水藍染ノ無地也、手巾全クヲ水淺木ニ染ル也、藍瓶ヲ睨クノミト云意ニテ名付ク、種々ノ模様ヲ染メ、或ハ絞ル物地白文藍或ハ地藍紋白モアリ、京坂祭祀等ニ出ル衆人ハ、紅染ヲ諸人一樣ニスル等アリ、其黨ノ有因目紋ヲ描ク也、江戸ニテハ更ニ紅染ヲ用ヒズ、祭祀等一樣ノ者モ藍染ニ坊名ヲ書ケリ、鄙ニハ常ニ紅文交ヘタル手巾ヲ用フ者アリ、城州小原女ノ黒木賣ノ用フル所ハ、地瑠璃紺ニシテ、右圖[○]圖ノ如ク、兩邊ニ和歌ヲ書ケリ、字白也、是一種ノ手巾、稀ニ他人モ用之テ好數トス、

大坂堂島ノ米買所用ノ手巾、地白ニ模様大形ニ紺染也、專ラ筆意摸セリ、模様種々大略圖[○]圖ノ如ク、專トシ、他准之也、普通手巾價百十六錢或ハ百二十四錢也、此堂島手拭ハ木綿厚ク紺色美ニシテ、價銀四五匁ヨリ金二朱許リニ至ル、是ヲ豎四ツ折ニシテ肩ニ掛ク、彼徒ノ標目トシ、或ハ實用ノ手巾ハ別ニ携フモノ多シ、

以寸法爲名

追書、天保中、手巾價六七十錢ヨリ百錢ニ過ズ、今慶應中、三百錢ヨリ三百四五十錢ヲ普通ノ物價トス、堂島手巾准之バ幾文ナル歟、後日聞得テ誌之、

〔嬉遊笑覽^二上^一〕不角が江戸總鹿子序に、すこぶる汗道具五尺手拭をまぼりぬ云々、手巾はむかしは短きはなし、[○]中松の落葉小歌^{五尺}手拭五尺手拭中そめて、おれにくりよより宿におけといへるは、古き三尺手拭の小歌をざれて作り替たる也、

〔懷子伽^十上^一〕

夏

重貞

あがるべき道夏山の高岸に

愛旅を四尺手拭手に持て

休甫

汗をいる、や茶屋の腰掛

あせもあつさも打忘てよ